

ピンボケ談義「世界文化遺産と奴隷・民」

ある博物館と世界文化遺産を見て

米国のボストン市の博物館を見たことがある。そこで「東洋のコーナー」に入った。石作りの大きな仏像が中央にあった。よくこんな大きなものを無傷で運んできたものだと驚いた。他にいくつもの塑造や木造の仏像が陳列されていた。脳裏に浮かんだのは、それが安置されていた寺院、それを礼拝する中国の人々、ある日そこに踏み込んだ米国人たち、強奪したのか、金を与えたのか、本尊を持ち出す彼らの姿であった。博物館を出た時、「これは略奪者たちの倉庫だ」と思った。

世界文化遺産というと、とてつもなく大きい古い建造物を想像する。小生が見たことがあるものは、名前は忘れたが、ドイツのあるカトリック教会、中国北京市の故宫博物院（紫禁城）、万里の長城がある。

ドイツの石造りの教会を見て、建物の高さに驚いた。せいぜい1，2階しか使わない建物になぜ使用もしない高い塔をのせて作る必要があったのか不思議に思った。教会内部の一角には創建当時の国王と司祭のミイラを納めた石棺が並んで置かれていた。博物館もあり、代々の司祭が使ったという儀仗（＝つえ）が展示されていた。杖には多数の色とりどりの宝石がついていた。手作業で硬い原石を磨いたインドかアフリカの多数の職人たちの姿が目には浮かんだ。同時に、それを掲げて信者に権威を示す司祭の姿も浮かんだ。その杖は、王権を支える兵隊や武器と結びついて、数百年の間、民衆を支配した教会権力の象徴なのだ。

万里の長城を見た時、その周辺で数世代にわたって逃げることができず、土石を運んだり、煉瓦を焼くしかなかった多数の被征服者・奴隷の存在を思わざるを得なかった。

紫禁城は広大な敷地に数々の建物が建ち並び、中国全土から集めた富の大きさを感じた。同時に、その裏にある圧政と厳しい徴税の存在を思わざるを得なかった。

産業革命以前には動力機械は殆どなく、巨大建築物を作るには、せいぜい牛馬や荷車程度の機械を使い、多数の人々の気が遠くなるような長い年月の労働が必要である。多分それらは戦争の捕虜か、強制的にかり出された貧民、つまり奴隷らを作ったのであろう。英語の労働（labor）は奴隷（slave）を語源にしていることも頷ける。

奴隷と臣民

魏志倭人伝には「生口」という言葉が出てくる。いわゆる奴隷のことで、卑弥呼は西暦239年、魏の皇帝に男4人、女6人の生口を布と共に送った。中国の皇帝はこれを歡び、女王を「親魏倭王」と為し、金印を授け、銅鏡100枚を含む下賜品を与えた。卑弥呼は千人の侍女に囲まれていたというから、征服した日本国内の隣国から若い女性たちを多数差し出させ、彼女たちの生殺与奪を握っていたのであろう。卑弥呼が死んだとき、五百人の侍女が殉死したと書かれている。「鬼道を祭祀した」ということは、卑弥呼が占いをした巫女の総帥であったことを示している。王権と神権とは一体であり、神の意志を占いで押し量り、王がそれ

を武力を背景にして進めるという形をとるのは古代国家に共通している。

白川静（しずか）先生の象形文字に関する本を読んで、一番驚いたことは巫女と奴隷に関する記述であった。巫女に関して一字だけ紹介しよう。「謹」という漢字の右側（つくり）は、髪飾りをつけた巫女の象形だという。謹とは神に「巫女の非礼をお詫びする」ため、巫女を火で焼き殺す象形だという。つくりの下に四つの点（れっか）が省略されているが、古い象形文字には、それがリアルに描かれている。その語源の意味は、占いが神の意を正しく伝えなかったのは巫女の占いが悪かったためだと、民衆の前で巫女を焼き殺したことによる。それが神に対する「謹（つつし）み」なのだ。また民衆の「民」の字は奴隷の象形であるという。高級奴隷が臣、下級奴隷が民で、ともに顔の目の周囲に針を刺して入れ墨をする象形で、その人間が奴隷であることを示したのだという。奴隷は戦争の捕虜か、従属のあかしとして、人質として提供された人々で、巫女と同じ境遇の人々である。

本当にすばらしい建造物とは

小生は中学生のころ、顕微鏡に夢中になった。見た物はドロの中のアメーバ、ゾウリムシ、ミドリムシや藻。ハエの足、トンボや蝶の羽、花粉など、身の回りの生き物であった。ゾウリムシが活発に動き回る不思議な別世界。ハエの足の吸盤や爪は、ハエがガラスや天井にもとまることができる理由を教えてくれた。整然と鱗粉が並ぶ蝶の羽の荘厳さ、それは自然が長い進化の過程で作り出したもので、巨大寺院の瓦屋根も及ばない見事な建造物に見えた。

ひねくれ者でピンボケの小生には、博物館は権力者の収奪物の倉庫に思える。世界文化遺産は奴隷や貧民の強制労働による建造物に思える。しかし真の宗教とは、巨大な教会や寺院が崩れたり、焼けた時、その瓦礫や灰にまだ集まる人々があれば、それらの人々の心の中にこそある。宗教者とは五合庵のようなあばら屋に住み、泥棒に自分の布団をくれてやるような人であって、民衆の前に美しい杖をかざすような人ではない。威厳を示す僧衣を着て、我々に分からぬ経を詠む者ももちろん宗教者ではない。病気は自然に治ったのに、白衣を着て薬で治したような顔をする医師も同じ類であろう。（100410）